

マレー農村ガロック再訪

坪 内 良 博*

Galok, a Malay Village in Kelantan, Revisited

Yoshihiro Tsubouchi*

Drastic economic changes are taking place in Malay villages, which are being accelerated by governmental development policy. Remarkable changes can be observed even in the village of Galok, which is situated neither in a double-cropping area nor in a rubber or oil palm estate area and thus tends to benefit less from development planning. The changes so far seen in Galok are as follows.

The high-yielding varieties of paddy, which are important for rural development of double-cropping areas, have not been accepted in Galok because of the poor water conditions, although the villagers are continually trying to introduce new strains of traditional varieties. On the other hand, the hiring of tractors has spread in spite of the continuing instability of the harvest. Tractor hire became possible owing to the increased cash income deriving mainly from newly introduced tobacco cultivation. Tobacco cultivation in the dry-season paddy fields of Galok played as important a role as did the high-yielding varieties in double-cropping area. The economic gap between Galok and the more rapidly developing areas is, however, still considerable. Thus, migrant working, which had once been important but had declined in the early years of tobacco cultivation, has again become popular among Galok youths. In this sense the Galok villagers seem to be following the example of the more modernized Melaka villagers.

The influences of the outside world are not only economic but also sociocultural. The spread of formal education is one of the most remarkable features. Many village children now have experience or expectations of having Malay-medium high-school education, as a result of the above-mentioned increase of cash income and the priority given to Malays in the distribution of scholarships. On the other hand, the *pondok* school, the former center of traditional education, has almost completely ceased to function in the education of youth. School education has produced in village youths an urban or non-agricultural orientation, which is supported by their parents. Thus, the economic development of Galok seems to be leading towards an exodus of village youths.

I は じ め に

調査地ガロック (Galok) はクランタン川を河口から25マイル余 (約 40 km) さかのぼった、川の左岸の高位もしくは中位の河岸段丘上に、川から 1/4-1/2 マイル (0.4~0.8 km) 離れて展開するマレー人の農村である。郡役所所在地のパシールマス (Pasir Mas) からクランタン川に沿って約 9 マイル (14 km) 上流に位置する。パシールマスは人口一万余の小さな町で、そこからさらに10余マイルでクランタン州首都コタバル (Kota Bharu) に達することができ

* 京都大学東南アジア研究センター ; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

る。前世紀の終りに開拓されたと推定されるガロック集落には、現在約150世帯のマレー人が、道路に沿って約1マイルにわたるリボン状集落を形成して住んでいる。彼らの主な生業は水稲耕作とゴムタッピングで、いずれも小規模に行われてきた。1968年に **Malayan Tobacco Co. (M. T. C.)** によってタバコ耕作がこの村に導入されて以来、人々はもう一つの主要生業をもつようになった。タバコ耕作が導入された時期に低迷していたゴム価格は近年ややもち直して来ており、リプランティングの効果もあらわれはじめている。通勤を含む町との関係も次第に強くなった。天水依存によって来た水稲耕作は、自給用という性格を保ち続けるが、現金収入の増加につれて畜力依存からトラクター賃耕へと移行しつつある。本稿で報告するのは、1970/71年の調査時とそれから6年余経過した1977年末とにおける村人の生活の変化についてである。¹⁾ 1970/71年には全戸145世帯²⁾の調査を行なったが、1977年には1カ月足らずの滞在中に水稲耕作世帯15戸と、比較のために非水稲耕作世帯9戸をそれぞれのカテゴリーからランダムに抽出し、インタビューしたに過ぎない。水稲耕作農家15世帯のうち14世帯は以前の調査時にも在住しており、一戸のみその後新たに世帯を設けたものである。家族発展の段階変化にともなう状況の自動的变化を考慮する必要があるとしても、以前から存続する14世帯の水稲耕作者における新旧の比較は最も興味深いデータを提供するであろう。

II 生業における変化

(1) 水稲耕作

クランタン川の下流部ではクムブ計画をはじめいくつかの二期作化計画が実現しているが、ガロックにおいては水稲耕作に関しては天水依存という伝統的な形態がそのまま存続している。クランタン川から灌漑のために水を得るには余りにも崖が高く、またこの地域には支流もない。計画をおこすには水田面積が余りにも小さ過ぎる。かくして現在でも以前と同じように高いしっかりした畦をつくって天水を保持して耕作が行われている。

1970/71年度において、ガロックに居住して稲作を行なっていた71世帯が雨にめぐまれた場合耕作できる最大水田面積は約100エーカー (40.5 ha) であって、一世帯平均1.4エーカー (0.57 ha) であった。このうち23エーカーは他人から借りた耕作地で他は自作地である。小作をしている者は19世帯 (26.8%) を数えるが、このうち自小作が13世帯で、小作のみを行なっている

1) 1970/71年における詳しい状況については下記の報告を参照されたい。「クランタンの一農村におけるタバコ耕作の導入と社会・経済的变化」『東南アジア研究』9巻4号, 1972. 3; 「東海岸マレー農民における土地と居住」『東南アジア研究』10巻1号, 1972. 6; 「マレーシア東海岸の天水田地域における稲作」『東南アジア研究』10巻2号, 1972. 9; 「東海岸マレー農民における結婚と離婚」『東南アジア研究』10巻3号, 1972. 12; 「マレーシア東海岸の村落住民の収入と収入源」『東南アジア研究』10巻4号, 1973. 3; 「クランタンの農村におけるポンド (寄宿宗教塾)」『東南アジア研究』11巻2号, 1973. 9.

2) 1軒の家に居住し生産活動の単位となっているが、二つの消費単位を構成する複婚世帯を、生産の側から捉えてここでは1世帯として扱っている。消費単位の合計は146である。

のは6世帯であった。自小作は小作の延長としてよりもむしろ自作の延長としての性格の方が強いので、基本的に小規模な自作農を主体としているといえる。この性格は1976/77年においてもほぼそのまま存続しているように思われるが、農家の経営規模はやや大きくなっている。すなわち、サンプル稲作農家15世帯が耕作できる水田面積は29.75エーカーであって、このうち28.6%にあたる8.5エーカーは他人から借りた小作地である。平均経営面積は2エーカー、小作面積平均は0.6エーカーである。サンプル農家のうち水田の全部または一部を小作しているのは9戸(60%)である。1970/71年にも調査された14戸について調べると、当時小作をしていた者は5戸で、今回は8戸に増えている。所有面積および小作面積の増加はこの期間に稲作農家が若干の土地を買ったり、小作関係を増やしたことに関係しているように思われる。このことは、この地域において稲作農家数が減少しつつあることを想定させる。小作契約は口頭で行われるのが伝統であったが、この傾向はそのまま維持され、契約書がつくられることはない。刈り分け小作が相変わらず行われており、収穫の2分の1が地主に渡される。

この地域に灌漑施設を欠くことはいわゆる高収量品種の導入を妨げている。15戸のサンプル農家において高収量品種を採用している者は皆無であるが、この状況は全農家にもあてはまる。高収量品種を採用しない理由として、15戸中14戸が、「水条件が悪いから」と答えており、1戸のみは、「これまでやったことがないから」と答えている。それではこの問題が解決されたらどうするかという問いに対しては、14人が「他の者がやるなら自分もやる」と言い、一人が「誰かが成功すれば自分もやる」と答えている。

伝統品種の使用に関して、各農家は毎年同じ品種を栽培するのではない。雨の多寡は品種選択の重要な決め手になるし、また伝統品種といえどもたえず新しい品種の導入が行われているのである。たとえば、1970/71年調査時に最も広く用いられていた晩生品種の一つ、パディ・ピア(Padi Piah)は、ピア(Piah)とよばれる中国系の農民によってその対岸サロール(Salor)地区のペンカラ・クボール(Penkarang Kubor)からもたらされたものであって、サロールではパディ・クティップ(Padi Kutip)と呼ばれる品種である。またパウ(Pauh)とよばれる品種は2年ほど前にガロックに導入され、黒色がかった深水用の晩生種パウ・ブラット(Pauh Berat)と白色がかった浅水用の早生種パウ・リングン(Pauh Ringan)とがある。1970/71年の調査当時若干の農家によって用いられていたセグパル(Segupal)という品種は、今ではもう種もみが手に入らないといわれる。

1970/71年と1976/77年の両年度に関して、これらの期間を通して在村した14戸のサンプル稲作世帯が用いた品種を比較すると、表1のようになる。主力品種であるパディ・ピアの使用は変わらず、また1970/71年度の第二の品種であったインタン・ブリアン(Intan Berian)の使用も続けられているが、サンプル世帯の間では、ポック・ドウト(Pok Dut)、セグパル(Segupal)、パディ・パッカマット(Padi Pak Amat)、パディ・ケダー(Padi Kedah)、パ

ディ・メラック・シラム (Padi Merak Siam), プルート (Pulut, もち米) の使用が消失して、代りに、パディ・パウ (Padi Pauh), アリ・ログット (Ali Logat), モラック (Morak), パディ・パク (Padi Paku) が使用されるようになっていく。1軒の農家が用いる品種についていえば、二つの調査年度において全く品種の変更を行っていないのは3世帯に過ぎない。この意味でのこの地域の農民はただ伝統に従って米をつくっているのではなく、与えられた条件の中でたえず向上を求めているといえることができる。

天水耕作の問題点は、年による植付・収穫面積および反当収量の変動が大きいことである。1970/71年の調査時においては、1農家平均作付面積は1.14エーカー（最大可能耕作面積の81%）であった。その前年（1969/70）にはもっとひどい水不足があって平均0.90エーカーが作付されたに過ぎない。今回の調査では、15戸のサンプル農家の1976/77年の平均作付面積は1.22エーカー（最大可能耕作面積の61%）、平均収穫面積は1.05エーカーであった。水不足の年には単位作付面積に対する収量もまた低くなる。前回の調査によるとこのあたりでは通常の収穫の場合309ガンタン/エーカー (gantang/acre)³⁾ が期待されているが、1970/71年度の収穫は220ガンタン/エーカー、1969/70年度はわずか124ガンタン/エーカーであった。1976/77年度の15サンプル農家では、作付面積に対する収量は162ガンタン/エーカー、収穫面積に対する収量は187ガンタン/エーカーであった。次の収穫（1977/78）は雨にめぐまれて豊作が期待されている。

不作の主原因は水不足であって、サンプル農家のうち13戸（87%）がこれを原因として挙げている。次に重視される不作原因は、水過剰、病害、および虫害であるが、各々2戸（13%）の農家がこれを指摘しているに過ぎない。水過剰は村の一部の低い位置の水田において生じたものである。また一人だけ鼠の害を不作の原因としている。（以上重複回答を認めている。）過去10年の間に豊作・不作がどのくらいの頻度でおこったかを知るためにこの期間連続して耕作を続けてきた12戸のサンプル農家の回答をもとに、豊作、平年作、不作、凶作の比を算出すると、1.5 : 5.9 : 2.5 : 0.1となる。凶作はめったにないが、不作は4年に1回はおこるものと認

表1 用いられた品種別にみた稲作世帯数*

品 種 名	1970/71	1976/77
Piah (Padi Kutip)	9	9
Pok Dut	4	
Intan Berian	2	2
Segupal	2	
Padi Pak Amat	1	
Padi Kedah	1	
Padi Merak Siam	1	
Pulut	1	
Ali Logat		3
Padi Pauh		3
Morak		1
Padi Paku		1

* 稲作世帯14戸について。重複回答あり。

3) 1ガンタン (gantang) = 1英ガロン = 4.546 l. 収穫はもみ米ではかられる。もみ米 309 ガンタン/エーカー = 白米 1.37 トン/ha = 白米 0.92 石/反。

識されているようにみえる。

技術・労働上での顕著な変化は、トラクター雇用の増加である。サンプル農家15のうち11世帯（73%）が1976/77年の水稲耕作のために集落外からトラクターを雇用している。1970/71年においては全農家のうちトラクター賃耕に依存するものは31%に過ぎなかったのである。1970/71年の時点において、筆者はこの地域にはトラクター賃耕の普及に関して二つの制限要因が存在していると考えた。第1に、当時トラクター賃耕を利用したのは主として水牛や牛を所有せぬ者であった。水牛や牛はこれらを飼育すること自体によっても、生まれた仔の売却や成長にともなう価格の上昇を通じて利益を生み出す。このような家畜飼育と耕作における畜耕とが密接に結びついているために、トラクター賃耕が全面的に採用されることは考えられなかった。第2に、雨量の如何によって作況が左右される不安定な条件の下においては、自らの労力の浪費は惜しまないが、現金支出を惜しむ者が存在し、このこともトラクターの全面的普及をうけ入れない一つの要因となっていた。ところが、事実上、1976/77年においてトラクター賃耕を利用したサンプル農家のうち6戸（54.5%）は自身で牛を飼育しているのである。観点を変えれば、牛を所有するにもかかわらずトラクター賃耕を利用した農家は60%に達するのであって、後に述べるような現金収入の道が開けることによって、前述の考え方はくつがえされたのである。

ガロックにおける化学肥料使用者は1970/71年においては21名（全農家の29.6%）であったが、このうち2名は川むこうの水田で肥料を使用しているため、ガロック地域内の水田における肥料使用者は19名（26.8%）ということになる。1976/77年の化学肥料使用者はサンプル農家15戸中3戸（20%）に過ぎなかった。化学肥料購入を可能とする現金収入は、後に述べるように多くの場合かなり増加しているにもかかわらず、使用者が減少したといえる。これは1976/77年の水条件が1970/71年よりも劣悪であったため肥料投入を差控えた者が存在したためとも考えられる。1970/71年においては化学肥料を用いた者は平均226ガンタン/エーカーの作付面積あたり収量を得たのに対し、用いなかった者の収量は165ガンタン/エーカーであった。1976/77年においては、化学肥料を用いた者178ガンタン/エーカーで、用いなかった者156ガンタン/エーカーであった。水条件の悪い年には化学肥料を用いた者と用いなかった者との収量比が小さいことがわかる。かくしてガロックでは最近、隣部落に新設された農業協同組合（LPP=Lembaga Pertubuhan Peladang）を通して肥料購入の機会が増大しようとしているにもかかわらず、現状では肥料の全面的使用は水条件の良い年に限定されるかもしれない。この結果は、当分のところ、水条件の良い年における収量と悪い年における収量との差の拡大をもたらすことになる。

伝統的にはこの地域では有機肥料をも使用することが少なかったのもあって、サンプル農家15戸中、現在草木の灰などを水田にまいている者は5戸（33.3%）に過ぎない。これらのうち

2 戸は同時に化学肥料の使用者でもあり、この意味では一部の熱心な農家は、伝統的・近代的方法を問わず収量をあげる努力をしていることがわかる。除草は伝統的に行われず、1976/77 年におけるサンプル農家においても、除草を行なっている者は皆無である。

ガロックにおける水稲耕作は原則として家族労働によって行われてきた。ケダー州にみられるような田植えの際の労働交換などは伝統的に皆無であり、労働力不足分は雇用によって補うのが普通であった。1970/71 年においては、耕起・整地作業のために水牛または牛を使う者を雇用したケースが5件あったが、1976/77 年においては、少なくともサンプル農家に関してはこれらはもはや皆無であった。すべてトラクター賃耕にとって代られたのである。1970/71 年には、苗束づくりは10.6%、田植えは12.1%、収穫は18.3%の農家が一部または全部の作業を雇用労働に依存していた。1976/77 年についてサンプル農家15戸における割合は、苗束づくり13.3%、田植え40.0%、収穫20.0%であった。とくに田植えについて雇用の増加を示している。上述のような雇用傾向の増加にかかわらず、自家消費を目的とする米づくりの性格は保たれており、サンプル農家中1976/77 年に米を他人に売った者は皆無である。

(2) ゴムタッピングおよびタバコ耕作

ガロックにおいてゴムタッピングは水稲耕作とならぶ重要な生業であった。伝統的に水稲が自家消費用であったのに対して、ゴムは完全な換金作物である。1970/71 年においてはガロック居住者が所有するゴム園の総面積は158 エーカーで、所有世帯数は88、所有者1戸あたりの平均面積は1.7 エーカーであった。リプランティングを受けたばかりでタッピングされていない若木や、放置された老木などを除いて、当時97 エーカーが実際にタッピングされていた。これらのゴム園は自分でタッピングするか、あるいは他人に貸し出されている。このほかに集落外でゴム園を借りている者もある。1970/71 年には94世帯において世帯員のいずれかがゴムタッピングに従事していた。ゴムのタッピング作業も稲作と同様、平均1.4 エーカーという零細な規模で行われていた。

ゴムは従来非常に有利な生業と考えられてきたが、1970/71 年の調査時においては、価格低迷中であり、ガロックで生産される4～5級のゴムの価格は1カティ (kati, 0.61 kg) あたり M\$ 0.30～0.40 であった。1960～62年頃にはM\$ 0.70～0.80 もしていたのである。ゴム価格の低下と、次に述べるタバコ耕作の導入のために、当時はタバコ耕作期間中にタッピングの休止をする者の存在が目立った。1976/77 年のゴム価格は、1カティあたりM\$ 0.60～0.78 であって、物価上昇の影響を考慮すればやや有利になったといえる程度である。1976/77 年においてはサンプル稲作農家15戸のうち9戸(60%)、非稲作農家9戸のうち4戸(44%)がゴムタッピングを行っていた。平均タッピング面積はこれらの13戸についてみると、2.2 エーカーとなる(表2参照)。平均面積が1970/71年当時よりも大きくなっているが、これはサンプリングエラーの範囲内の現象というよりも、リプランティングが終って稼働化したゴム園が増加してい

表2 ゴム園所有およびタッピング従事者とその規模 (1977)

サンプルのカテゴリー	サンプル 総 数	ゴ ム 園 所 有 者	平均所有 面 積	タ ッ ピ ン グ 従 事 者	平均タッピン 面 積
稲 作	15	11	2.0 エーカー	9	1.9 エーカー
非 稲 作	9	7	1.8 エーカー	4	3.0 エーカー
計	24	18	1.9 エーカー	13	2.2 エーカー

るためといえそうである。

ゴム園を借りている者はタッピングに従事しているサンプル13戸中6戸(46%)で、1970/71年における24% (23/94)を上廻っている。収益を所有者と作業者とで折半するパワー (pawah) の制度の適用に関しては以前と同様である。

タッピング技術・装備に関しても以前と同様で変化はみられない。ゴムシートはスモーキングに付されることなく、高床家屋の床下あるいは家屋付近の日陰で自然乾燥され、隣集落のライセンスをもつ中国系集荷業者、または各戸をまわって来るマレー人の仲買人 (praih) に売られる。

タバコは比較的最近導入された換金作物で、乾期中の水田を利用して耕作が行われる。タバコ耕作の導入は1968年に M. T. C. (Malayan Tobacco Co.) を通して行われ、ガロックの中央部に同社直営の集荷・乾燥のためのステーションが設けられた。1968年に64世帯であった耕作者は、4年目の1971年には124世帯にまで増加した。これはガロック総世帯数の85.5%にあたる。1970年以来 M. T. C. 以外のより小規模なタバコステーションが、隣集落をはじめ各地で設立され、タバコの葉の買入れをめぐる競争が行われるようになる。そして大組織である M. T. C. は自社の貸付けた資金で耕作させたタバコを、他の小規模なステーションや仲買人に横取りされることがおこったりする。1975年にはガロックにおける M. T. C. ステーションは操業を停止するに至り、村人は村外の小規模ステーションにタバコの葉を売渡すようになった。1977年においては、サンプル総数24のうち17世帯(71%)がタバコ耕作を行っていた。この割合は1971年よりも低くなっており、一時の熱狂的な耕作参加から、冷静な定着化へとむかっているといえる。

この期間における変化は耕作世帯数の増減だけにはとどまらない。1世帯あたりの栽培本数も急激に増加しており、第1年度の1968年には1世帯あたり1,000本に制限されていたものが、家族員の名義を用いることによって次第に1世帯あたりの栽培数を増やしてきた。また、3期に分割された耕作期間のうち、1970年までは第1期のみの耕作が認められていたが、71年からはガロックの一部では第1期と第3期の耕作が行われるようになった。M. T. C. による直接取引が行われなくなると制限はほとんどなくなり、1世帯平均栽培本数は更に増加した。他方、1968年から71年にかけては、栽培本数1,000本あたりの収入は毎年低下していた。その理由は次の通りである。(1) 第2年次における大雨、および第3年次と第4年次第1期における旱ば

つが収量を減らし、また品質を悪くしたこと (2)栽培本数の増加のため十分な世話ができない場合が生じたこと (3)十分な作業能力をもたぬ者までが耕作に参加するようになったため、世話が十分行われない場合が増加したこと (4)耕作量の増加にともなって M. T. C. の買付け条件がきびしくなり、品質査定がきびしくなったこと、である。とくにこの時期は、買手として M. T. C. の独占状態が続いていたため、1カティあたりの価格が等級によってM\$ 0.10～0.30ときめられていたが、実際の買取り価格はM\$ 0.15程度にまで下落したといわれる。このような単価の下落にもかかわらず、1世帯あたり栽培本数の増加がタバコ耕作による収入を増加させたのであった。1977年には1カティあたりの価格はM\$ 0.10～0.37といわれるが、平均買付価格が比較的高くなっているの、1,000本あたりの収入はかなり上昇している。サンプル世帯のうちタバコ耕作者についてみると、タバコ耕作による収入は1977年には1971年の2.7倍になっている。(1971年のガロックのタバコ耕作者全体の平均収入に対しては3.1倍となる。) かくしてタバコ耕作は、今やガロックにおける主要生業となったのである (表3参照)。

表3 タバコ耕作の変化

年次	耕作世帯の割合	平均栽培本数	1,000本あたり収入	タバコ耕作による収入
1968	44.1%	1,328本	M\$ 162	M\$ 214
1969	47.6	1,494	149	221
1970	77.9	1,864	125	234
1971	85.5	3,891	101	384
1977	70.8	5,676	210	1,191

タバコ耕作は乾期の水田を利用するところから、稲作農家とのかかわりを強く有してはじめられた。水田を所有しない若年世帯主の耕作開始は第2年次以降の場合が多い。この場合、他人の土地を借りても、乾期の水田に対しては借地料を支払わないのが通例であり、タバコに用いた肥料の残存効果があるということから地主も土地を貸すのを喜ぶ傾向があった。タバコ耕作の定着化と土地不足にともない、1977年においては一部の者は栽培本数1,000本についてM\$ 10の借地料 (sewa) を支払うようになっていることに注目する必要がある。

(3) その他の収入源

以上の外にもこの6年間にかなりの変化の様相を示す職業がいくつかある。次にそれらについて略述しよう。

a. 賃金労働

第1は常勤的または非常勤的な賃金労働である。ガロックにおける M. T. C. ステーションの開設は、約4カ月のタバコ収穫期の間、選別・運搬・梱包・清掃・警備などのために多くの労働力を周辺の村々から集めて、タバコ耕作自体と並んで、村人の生活に大きな変化をひきおこした。1971年にはガロックからは、男子13名、女子73名が M. T. C. ステーションで働き、

その10才以上の人口に対する割合は、男子6.9%、女子29.8%に達した。中でも15～19才女子においては同一年齢階級の人口の72.1%という高率を示したのである。職種によって出来高払いあるいは時間給が適用され、前者の場合、男子1時間M\$0.45、女子M\$0.40が支払われていた。労働者の数が仕事の量に比して多過ぎるので、作業量に影響されない警備員の場合は、月M\$80～90の収入があるが、その他の職種ではせいぜいM\$40～60が得られるに過ぎなかった。M. T. C. ステーションの閉鎖にともない、他部落の小規模ステーションに雇用される若干のケースを除けば、このような機会の存在はきわめてわずかになった。現在、サンプル世帯24から他部落のタバコステーションに雇用されているのは2名の男子で、月M\$120～140の賃金を得て、荷役のため年間6～10カ月働いている。

1977年の時点ではサンプル世帯24の中には、政府関係の仕事で固定給を得て集落外に通勤している者が2名含まれている。その1は灌漑排水局作業員(月収M\$216、1971年にはM\$130)、その2は病院看護婦(月収M\$350)である。後者の夫は兵隊で現在集落外に別居している。サンプル中にはパシールマスとタナメラを結ぶ道路で営業するタクシーの運転手が2名含まれている。歩合制で、しかも毎日仕事がある訳ではないがM\$200～300程度の月収がある。1971年にガロック全体からこの種の仕事に従事していたのは、小学校教師3名、マラリア蚊駆除作業員3名、タクシー運転手3名、成人学級講師、兵隊、灌漑排水局作業員、コーヒーショップ店員、トラック運転手、タバコステーション常勤作業員各1名、計15名であった。サンプル世帯にみられる比率がそのままガロック全体に適用されるとすると、現時点では30名の常勤的雇用者が集落内に居住していることになる。

b. 出稼ぎ

タバコ耕作が導入されるまでは、出稼ぎはこの集落の住民にとって重要な収入源となっていた。タバコ耕作開始以来、その数は著しく減少したが、それでも1970/71年度には10名の者が出稼ぎのために一時的に離村した。ガロック住民の出稼ぎの特徴は、第1に若年者が主力を占めていることであり、第2に毎年確実に行く訳ではなく、同一人が行ったり行かなかったりすることであった。1970/71年における最も重要な出稼ぎは、収入折半(pawah)の約束によるゴムタッピングで、パハン(Pahang)州へ行く者が多かった。この年における出稼ぎ経験者のうち半数(5名)が、このようにして20日～3カ月の間パハンへおもむいた。M\$20～200が彼らのもち帰った収益である。クランタン州のゴム園地帯へ出かけた者も1名いる。以前はタイ領へ入ってタッピングに従事する者もいた。ケダー(Kedah)州における水稻の収穫はかつては重要な出稼ぎの対象となっていた。これは当時存在したケダーとクランタンとの収穫期のずれを利用して行われてきたのであるが、ケダー州における二期作化の進展が農業暦を変化させたこととこの地域におけるタバコ耕作の導入によって著しく衰退した。1970/71年には1名だけがケダーにおもむき、約1カ月滞在してM\$60をもち帰っている。クランタン州内にお

る稲作地サロールへ行き、収穫作業に従事する者が若干あり、1970/71年には3名を数えた。1週間から10日滞在して働くのであるが、収入は1日あたりもみ米5ガンタンである。

M. T. C. ステーションの閉鎖、タバコ熱の平静化などのために、1977年においては再び出稼ぎが増加している。ただし、出稼ぎ先および職種には大きな変化が生じて、今ではシンガポールが最も重要な出稼ぎ地となっている。ビザの規制のため長期滞在はできないが、普通、2週間から2カ月滞在して主として建設現場で働く。日給はシンガポールドル（ほぼマレーシアドルと等価）で\$9~12である。たとえば1カ月滞在してその間食費に1日\$5程度を費やし、M\$150をもち帰ったりしている。サンプル世帯24戸の中で過去1年間にシンガポールへ行った若者がいる世帯は5戸を数える。仮にこの割合をそのままあてはめるとすると、ガロック全体では約30人がシンガポールへ行ったことになる。この数字はガロックを含む行政単位ムキム・ジャボティモール（Mukim Jabo Timor）から1年に100人ぐらいシンガポールへ行くというムキムの長プングルの話と符号する。

パハン州へ行った者はサンプル中では2名を数える。一人は従来と同じくゴム園で収入折半のタッピングを行なっているが、他の1名は4カ月ほどの間、油やしの処理の労働に従事している。ガロック全体では1970/71年よりもっと多くの者が同地へおもむいたと考えられる。サロールの二期作地へ収穫作業に出かけた者はサンプル世帯中3名を数え、ガロック全体では以前よりもかなり多くなっていると推定される。1日あたりの収入もみ米5ガンタンは以前と変わらないが、期間は10日~1カ月と以前よりも長くなっている。受け取ったもみ米は売却せずに、自家消費用のためトラックを雇ってガロックへもち帰る。

c. 商売

1970/71年のガロックにおいては11軒の商店、4軒の飲食店、10軒の屋台がみられた。商店は雑貨、乾物、食料品を扱うものが多く、飲食店はコーヒー、茶、軽食を提供する。屋台店ではやし油であげたバナナ、めし、氷水や他の飲み物、鮮魚などを売っていた。これらの店の数は集落の規模に比して多過ぎるが、これはタバコシーズンにM. T. C. ステーションを目標として集まる人々を対象として新規に開店したものを含むためである。この外に10名の村人が行商人または仲買人として何らかの収入を得ていた。行商人や仲買人の場合は、屋台店とは逆にタバコシーズン中は商売を休んでタバコ耕作に専念する者があった。

M. T. C. ステーションの閉鎖にともない、1977年には屋台店の大部分および商店の一部は既に姿を消してしまっている。他方、一部の商店の売上げ高にはかなりの伸びが認められ、とくに木材を扱う者や牛を屠殺し肉を売る者などは、住民の現金収入の増加にともなう家屋の増改築や食生活の向上のためにその扱い量がかなり増加している模様である。行商人、仲買人については今回の調査ではその変化をほとんど知ることができなかったが、例えば1970/71年にゴム仲買を行っていた者は、現在ではドック（duku）とよばれる果実の仲買に転じ、以前より

も大きな収入を得ている例がある。

d. 家畜の飼育

ガロックにおいては牛 (*lembu*) や水牛 (*kerbau*) は農耕用に使用されてきたが、肉牛として売却することを目的として飼育されることもあった。トラクターが農耕用に広く雇用されるようになって、水牛の数は明らかに減少したように思われる。1970/71年に在村したサンプル世帯23戸のうち当時水牛を飼っていたのは2戸(4頭)であるが、1977年には水牛はもはや全く飼育されていない。これに対して牛に関しては異なる方向への変化が認められる。1970/71年にも在村していたサンプル世帯についてみると、飼育者数は16戸から12戸へと減少しているが、飼育頭数は計40頭で変化がない。すなわち、飼育世帯の減少と1世帯あたりの飼育頭数の増加がみられるのであって、農耕作業用から肉牛用へと目的の変化とそれへの対応が認められる。

e. その他

ガロックにはこの外に多くの種類の零細な収入源があった。例えば、やし糖づくり、大工、金銀細工師、自動車修理、理髪師、輪タク車夫、薪炭製造、呪医、産婆、仕立て裁縫、コーラン教師、菓子づくり、野菜づくり、地代、家賃、果樹からの収入などである。これらの各々の収入源には、タバコ耕作の定着化、および M. T. C. ステーションの設置と廃止に応じて若干の変動があったものと思われるが、今回の短期間の調査ではその全容を知ることができなかった。明らかに減少したのは、M. T. C. ステーションの設置と密接に関係していた家賃収入、輪タクによる収入、菓子づくりによる収入などであろう。その他の収入源は就業者の数や就業形態に若干の変化はあっても大体続けられており、これらからの収入も相応に増加しているとみられる。例えば、村人の現金収入の増加に応じて仕立て裁縫や大工の需要は高くなっているし、ゴム園のリプランティングが終って人に貸しはじめた者もある。また、以前はのこぎりで仕事をしていた者がチェーンソーを購入してより大がかりな薪製造を行なっている。

III 収入と生活水準の変化

(1) 収入の変化

1970/71年の調査時から1977年の間にマレーシアにおいてもかなり大きな物価上昇があった。マレーシア国立銀行 (Bank Negara Malaysia) の統計によると、1967年を100とする消費者物価指数は1970年101.3に対して1977年154.8となっている。食物に対する物価指数は1970年101.3に対して1977年169.4で更に上昇がはげしい。⁴⁾ もう一つの目やすとなるのは、村人の日常生活において最も重要と考えられている米の値段である。1ガントンのもみ米を現金価格に換算するとき、1970/71年には村人はM\$ 0.50と考えるのが通常であったが、1977年にはM\$

4) cf. Bank Negara Malaysia, *Monthly Statistical Supplement*, Feb. 1978, p. 42, Table VI-8.

1と考えており、この意味で米価は2倍になっている。断食月が終るころ、州政府が村のイスラームの導師（イマム）を通して集める一種の救貧目的の寄付金であるフィトラ（fitra）は、クランタン州では世帯員一人あたり精米1ガンタンということになっており、通常は現金でおさめるが、その額は1971年ではM\$ 1.20, 1977年にはM\$ 2であった。この場合には約1.7倍の上昇となる。

上述の数値を念頭におきつつ二つの時点のガロック住民の収入の比較を行うことにしよう。サンプル世帯24のうち23世帯は1970/71年にも独立した生計単位として在村していたから、比較に際して年齢構成の変化など世帯員の移動を含む家族発展上の問題点の存在を認めつつも、稲作を営む世帯14戸と稲作に従事しない世帯9戸に分けて、総収入および主な収入項目別の平均収入の比較を行うと表4のようになる。総収入に関しては稲作世帯では2.9倍、非稲作世帯では2.5倍の増加を示しており、いずれも消費者物価指数ないし米価の上昇を上廻っている。

表4 収入項目別にみた平均収入の変化

サ ン プ ル 世 帯 の 収 入 項 目	稲 作 農 家 (14世帯)				非稲作世帯 (9世帯)			
	(1)	(2)	増 減	(2)/(1)	(1)	(2)	増 減	(2)/(1)
	1970/71	1976/77		×100	1970/71	1976/77		×100
	M\$	M\$	M\$		M\$	M\$	M\$	
稲 作	93	112	+19	121	50	0	-50	0
ゴムタッピング	176	439	+263	250	169	526	+357	312
タバコ耕作	498	1,025	+527	206	338	522	+184	155
季節労働 (村内)	86	133	+47	155	80	133	+53	167
定 職	111	914	+803	820	0	267	+267	—
出 稼 ぎ	0	139	+139	—	8	55	+47	692
商 売	94	139	+45	149	548	1,036	+488	189
地 代 収 入	5	212	+207	4,128	32	378	+346	1,169
果 実 売 却	4	30	+26	842	4	24	+20	550
そ の 他	171	452	+281	264	32	145	+113	455
計	1,237	3,595	+2,358	291	1,261	3,037	+1,776	245

稲作農家の収入を増加させるのに最も大きく寄与した収入項目は、定期的雇用であり、タバコ耕作とゴムタッピングがこれに次ぐ。稲作からの収入（現金換算）は1.2倍となるのみであって、事実上の減収である。非稲作世帯の収入を増加させるのに最も大きく寄与したのは各種の商売で、次いでゴムタッピングと地代である。

しかしながら、収入の増加はすべての世帯に均等に出現したのではない。サンプル23世帯のうち収入に1.5倍以下の増加しかみられなかったものが5世帯（稲作世帯2, 非稲作世帯3）存在すると同時に、収入が3倍以上に増加したものが7世帯（稲作世帯4, 非稲作世帯3）存在するのである。最も増加が顕著な世帯は11.2倍の収入ののびを示しているが、これは娘（看護婦）とその夫（兵隊）の収入に負うところが大きい。逆に最もきびしい収入減を示すのはタ

バコを耕作していない稲作農家で1977年の収入は前回の58%に過ぎない。このことは、一様に低所得であったガロックの住民の中で、収入階層の分化が目立ちはじめたことを示唆している。このような収入差は土地所有の多さだけに帰因するのではなく、保有労働力の差によるところも大きいのが特記されねばならない。

(2) 物品所有状況

ベッド、ラジオ、自転車、ミシンの各々に関して、1970/71年と1977年とにおける所有状況を、両年次に関する資料がある23世帯について比較すると表5の如くとなる。以前所有してい

表5 若干の耐久消費財の所有状況

a. ベッド

		1970/71		
		有	無	計 (%)
1977	有	7	6	13 (56.5)
	無	2	8	10 (43.5)
	計 (%)	9 (39.1)	14 (60.9)	23 (100)

b. ラジオ

		1970/71		
		有	無	計 (%)
1977	有	5	7	12 (52.2)
	無	3	8	11 (47.8)
	計 (%)	8 (34.8)	15 (65.2)	23 (100)

c. 自転車

		1970/71		
		有	無	計 (%)
1977	有	14	4	18 (78.3)
	無	1	4	5 (21.7)
	計 (%)	15 (65.2)	8 (34.8)	23 (100)

d. ミシン

		1970/71		
		有	無	計 (%)
1977	有	5	3	8 (34.8)
	無	2	13	15 (65.2)
	計 (%)	7 (30.4)	16 (69.6)	23 (100)

たにもかかわらず現在では所有していない世帯も若干あるが、いずれの品目においても所有者数増加の傾向が確認できる。所有者の割合が最も高い自転車については、1977年には2台以上所有するものが5世帯存在するようになり、23サンプル世帯における合計所有台数は1970/71年の15台から25台へと大幅に増加している。オートバイの数もサンプル世帯の間では2台から4台へと増加している。従来村人の生活においては夜になると夫婦は幼い子供と自分達の寝間に退き、他の者は家の中の気に入った場所にござ(tikar)を敷き、1, 2個の枕を用いて就寝するのが普通であった。一部の夫婦だけがベッドを使用していた。ベッドの数は明らかに増加しているが、その外にござの代りにマットレスを用いる者が増加している。サロン(腰布)をまとめて寝る代りに毛布を用いるようになった者もある。1977年には23世帯中6世帯で毛布が使われている。蚊帳の使用も増加してきた。前回にはその所有状況を調べなかった腕時計についても、1977年には全サンプル世帯(24戸)のうち15戸(62.5%)が所有しており、合計所有

数は23個に達している。これらの変化は収入増を反映するものであり、村人の生活は便利さと快適さへと一歩近づいているように見える。

IV 家族・村落・リーダーシップ

1970/71年に在住していた23サンプル世帯について、1977年時点における世帯構成の変化を調べると以下のようなになる。3世帯で世帯主の死亡（2件）または高齢化（1件）によって、世帯主が子の世代へ移行している。世帯構成員に関する変動は表6の如くである。出生・婚入数は、死亡・婚出・独立数をはるかに上廻るので、平均世帯員数は1970/71年の5.4人から6.0人へと増加している。

表6 世帯員の変動 1970/71～1977

異 動 内 容	男		女		計	
	増	減	増	減	増	減
出生	12		11		23	
死亡		3		1		4
婚入	5		2		7	
婚出				2		2
独立		6		1		7
就学				1		1
子が親戚へ		2				2
孫が祖父母から親元へ	2		2	1	4	1
孫が祖父母から祖父母へ		1				1
計	19	12	15	6	34	18

世帯員の変動の中で注目すべき現象は、孫が祖父母から親元へ帰って行ったもの（4名）、孫が親元へ帰って来たもの（1名）、孫が父方祖父母から母方祖母へ移ったもの（1名）などの孫の移動、および子または養子の親戚への移動（2名）が含まれていることである。ガロックにおける世帯の枠はゆるやかであり、祖父母と孫との共住がしばしば行われ、かつそれらは必ずしも永続的・固定的ではないことが前回の調査で判明していたが、この傾向は依然として存在することが明らかである。

他の目立った世帯構成上の変化としては、上述の23世帯の中に、離婚した娘とその子を含むものが2世帯存在することである。1970/71年にはこれらの娘はそれぞれ未婚であったが、この期間に、結婚・出生・離婚が行われたのである。この地域における離婚はもともと多く、1970/71年の調査時には、結婚経験者のうち離婚を経験した者は40%近くあり、「離婚した娘+孫」が親と一緒に生活しているケースが集落全体で7例あった。クランタン州では離婚は減少傾向を示しているのであるが、ガロックに関してはある程度存在し続けていることが明らか

である。サンプルのうち、再婚して配偶者をむかえた者が男女各1名ある。再婚傾向が高いことも従来からの傾向の継続である。以上のように、家族生活の形態的な側面に関しては顕著な変化はみられないといえる。

収入の増加と外部社会との接触の拡大に応じて、結婚の際花婿側から花嫁に支払われる婚資金 (belanja) の額にはかなり高額なものが現われつつある。例えば、1977年の調査期間中に行われた村の娘と兵士との結婚にはM\$ 1,000 が授受されている。1970/71年の調査では、初婚者の場合M\$ 200 というのが最も多くみられたケースで、最高額がM\$ 500 であった。

表7 家庭内における決定者

事 項	決 定 者				
	回答者数	夫	妻	夫 妻	子
新 品 種 採 用	16	13	2	1	
大 き な 装 備	18	17		1	
収 穫 米 の 売 却	1	1			
農 地 の 処 分	7	4	2	1	
家 族 計 画 の 実 施	16	11	5		
子 の 進 学	22	22			
子 の 仕 事	22	3			19
子 の 配 偶 者	21	5			16

若干の重要事項に関する家族内での発議と決定についての質問を行なった結果は表7の通りである。この種の形式的な質問においては夫の決定権が誇張され易く、現実には妻の発言権はもっと大きいと考えてもよい。このことは妻自身の土地の処分に関しては妻が決めるというケースがあることや、家族計画の実施に際して妻の決定が重視される場合があることにもあらわれている。子供の就職や配偶者の選択に関しては本人の意向が重んじられる傾向がみられる。従来マレー農民の間では、子の結婚は親が決め、これがしばしば離婚にむすびついたといわれる。これを額面通りに受け取ることは、従来においても明らかに間違いを含んでいたと考

表8 助けが必要なときまず誰のところへ行くか*

事 柄	有答者数	親	兄 弟	他の親族	隣 人	大 工	その他
米が足りなくて借りる	6	2	2	1			1
借 金	13	4	1	7			3
農機具を借りる	0						
家を建てる	13		3			10	
田 植 え	7			5	1		1
収 穫	4			3			1
婚礼・葬儀	22	4	13	15	13		1
個人的な相談	17	3	2	7	1		4

* 複数回答を認める。回答者総数24。

えられるが、インタビューでは子供の自由選択権はかなり大幅に認められている。しかし、娘に対しては親の決定はなお重要と考えられている場合がある。

「助けが必要なときまず誰のところへ行くか」という質問に対する反応は、親・兄弟・親戚がいずれに偏することなくあらわれるが、重要なことは、いずれにも反応を示さぬ者が比較的多いことである。すなわち、村人の間には大抵のことを自分自身で解決し、必要ならば人を雇うという態度が存在する。ただし婚礼や葬儀だけは、兄弟、親戚、近隣ら相寄って助ける。このような生活パターンは近代化に応じた変化の結果生じたというよりは、この地域のマレー農民に伝統的なものといえる。

マレー人の集落（*kampung*）は生活単位である近隣の連続に過ぎず、それ自体の確定した枠も組織もないことを前回の調査で観察したが、この点に関しても基本的な変化はないものと思われる。今回の調査では質問票の中に、「あなたにとってむらとは何ですか」という項目を設けて、a. 居住場所に過ぎない、b. 行政単位に過ぎない、c. 生活を頼ることのできる親戚や友人のいるところ、d. 諸問題を解決するために人々が集うところ、という四つの準備された答のうちいずれか一つを選ばせた。c を選んだ者58%（14名、うち稲作世帯8）とaを選んだ者25%（6名、うち稲作世帯5）が目立ち、集団意識の強いdを選んだ者は1名（非稲作世帯）に過ぎなかった。

ガロックの含まれる行政府（*mukim*）を対象地域として農業協同組合が政府主導の下に1年前に発足している。稲作を営むサンプル世帯15のうち、これに加入しているのは5世帯（33.3%）に過ぎない。加入世帯主の平均年齢は39.7才、水田耕作面積は2.2エーカーである。非加入世帯主の平均年齢は43.5才、水田耕作面積は1.9エーカーで、年齢が高く、経営面積がやや小さい。この意味で年齢的・経営的に積極的になり得る者だけが組合に加入する。タバコ耕作がガロックにもたらしたような大きな利得を組合が提供せぬ限り、組合加入者が稲作農家と同義になるほど普及するのはむずかしいように思われる。

ガロックにはこの集落を代表するリーダーは制度的にも自然発生的にも存在しない。ガロックを含む行政村（*mukim*）の村長プングル（*penghulu*）は、1970/71年の調査時と同一人物であって、隣集落パダンハングス（*Padang Hanggus*）に居住している。村長になってから10年以上経過し、現在40才である。彼の母方の曾祖父は州首都コタバル近辺のカドック（*Kadok*）から人々を連れて移住して来たパダンハングス地域の開拓者であって、100エーカーの水田を有し、ムキム（*mukim*）の上位の行政単位であるダエラー（*daerah, sub-district*）の長プンガワ（*penggawa*）になった人物である。しかしその息子達が賭博好きで土地を売ってしまったため、現プングル自身は貧乏である。前代のプングルは彼の母のいとこであって、このような親戚関係から現職に指名されたというに過ぎない。

各サンプルに対して「プングルの主な仕事は何だと思うか」という質問を行なった結果は表

表9 プングルの仕事

	肯定した者の数	(%)
1. 行政的な情報を村人に伝える	1	(4.2)
2. 灌漑作業のため村人を組織する	0	(0)
3. 村人に融資を与える	0	(0)
4. 村人間の争いをおさめる	6	(25.0)
5. 村人の要求を地方政府に伝える	5	(20.8)
6. 村人を組織して道路その他公共施設の維持を行う	4	(16.7)
7. 村の宗教行事の世話をする	2	(8.3)
8. 村を守る	2	(8.3)
9. 多収量品種の普及をはかる	1	(4.2)
* 牛・水牛・土地の登記および身分証明を行う	13	(54.2)

サンプル総数24。

9に示す通りである。準備された回答1～9のいずれに対しても反応が少ないことが特徴であり、期待が一般に少ないといえる。その中でやや数が多いのは、村人の間の争いを仲裁すること(25%)と、村人の要求を地方政府に伝えること(21%)である。これらの準備された回答以外に多くの村人がプングルの仕事として自発的に指摘するのが、牛・水牛および土地の登記の際の証人としての役割である(54%)。上述の「争いの仲裁」には土地登記などの際の紛争の仲裁が含まれているように思われる。このように、プングルの仕事はリーダーとしての役目であるよりも、行政の末端業務である。村人は事務上の用務があればプングルをたずねる。サンプルのうち過去1年間にプングルをたずねたことがあるという者は46%(11名)である。

最も多い者は40回に近い回数を示すが、彼の職業はプングルの立会いを要する屠殺業である。

農業協同組合のリーダーたるべき人物の資質に関する質問を行なった場合も、この種の消極的な回答がみられる(表10)。すなわち、準備された回答群の中で最も多く選ばれたのは、行政的能力(29%)と親切・寛大な人柄(25%)であるが、この外の必要条件として村人の多くは異口同音に、「正直で不正をしないこと」(46%)をつけ加えるのである。

表10 農業協同組合リーダーに望まれる資格・資質

資格・資質	肯定した者の数	回答者に対する割合(%)
資 産	2	(8.3)
読み書き能力	4	(16.7)
信仰心と道徳性	1	(4.2)
行政能力	7	(29.2)
親切・寛大な人格	6	(25.0)
政府官吏に知己をもつこと	5	(20.8)
正直な人柄	11	(45.8)
そ の 他	3	(12.5)

回答者総数24。

V 教育と将来への志向

1970/71年の調査時において、タバコ耕作の導入とならんで大きく変化したものに初等中学

表11 13～20才男女各年齢における就学経験 1970/71

性	年 齢	非 就 学	小学校中退	小学校卒業	中学校入学	不 明	計
男	13	2	0	1	12		15
	14	1	1	0	5		7
	15	1	0	1	8		10
	16	2	0	0	2		4
	17	0	0	2	3		5
	18	0	1	5	2		8
	19	1	1	3	2		7
	20	1	1	1	0		3
	計	8	4	13	34		59
女	13	1	0	2	5		8
	14	2	2	2	6		12
	15	3	6	2	5		16
	16	1	2	3	0		6
	17	1	2	0	1		4
	18	3	1	4	1		9
	19	2	1	4	0		7
	20	1	2	3	1	1	8
	計	14	16	20	19	1	70

への進学率がある。表11は当時のガロックの若者の性・年齢別進学状況を示すが、15才以下における進学者の急増が認められる。当時、初等中学学齢に相当する13～15才の者の初等中学進学率は男子78.1%，女子44.4%であった。この時期においては比較的僅かではあるが、全く学校へ通ったことのない者が同時に存在し、上述の年齢層においてそれらは男子12.5%，女子16.7%を占めていた。1977年におけるサンプル世帯の中では、この年齢層の男子9名（どういう訳かサンプルにはこの年齢層の女子が一人も含まれていない）のすべてが初等中学在学中であり、このサンプルに関する限り進学率100%ということになる。

最近では上級中学進学者に目ざましい増加が認められる。すなわち1970年から連続的なデータが得られる23サンプル世帯においては、Form 4（高等学校1年に相当）以上に在学した経験をもつ者は、1970/71年に合計3名（男子2，女子1）に過ぎなかったが、1977年には13名（男子9，女子4）に達するのである。サンプル世帯の世帯主24名中16名（66.7%）が学校教育の経験を全くもたず、4名（16.7%）は2～4年の初等教育、他の4名のみが小学校卒の教育経験をもつに過ぎないことを考慮すると、きわめて大きな変化がこの10年間で生じたのである。

村落レベルにおける伝統的教育の場であったポンドック（pondok）は、このような学校教育の浸透にともない、その機能を完全に失ってしまった。ポンドックというのは小屋の意である

が、イスラームに関して深い知識をもつと考えられる教師（村では To'guru とよばれる）の住居を中心として建てられた小さな小屋に住徒が寝起きして教えをうける寄宿宗教塾がこの名でよばれる。ガロックと隣集落チェコック（Chekok）との境には1937年に開設された一つのポンドックがある。最盛期には50人の少年がいたといわれるが、その数は次第に減少して1960年ごろには約20人になったという。1970/71年の調査時点においてはその数は更に減少してはいたが、なお5人の若者が住み込んでいた。1977年には、彼らのすべてが既にポンドックを去って、3年ほど前に来住した20才前の若者が唯一の若い居住者となっている。若者に代って居住するようになった老人（とくに老女）達の数、1970/71年において既に30名を越えていたが、その数はほとんど動かず、ポンドックは老人ホームの様相をますます強めている。ただし以前居住していた者の3分の1は既に死亡、3分の1は帰村して、残りの3分の1が新入者とともに現在も住み続けているのである。

1970/71年の調査時にポンドック地域を一時的な生活の場として居住していた一般家族のうち、当時35才（現在41才）の一世帯主はその宗教知識を買われて、既に老齢となっていた前任者に代って3年前にガロック地域のモスクのイマム（導師）に選任され、現在ではガロックに居住している。もう一人の世帯主（現在48才）は、州政府によって3年前に近くの中国系住民の多いムキムのプングルに任命されたが、ひき続いてポンドック地域に居住している。また、数年前ポンドックへ来て歯医者を開業した者があり、遠くパシールマスからその噂をきいてやって来る患者もある。

サンプル世帯主に対して、学校教育の評価をたずねると例外なく「良い」と答えている。何故良いかとたずねた結果は表12の通りである。「子供の将来のため」を選んだ者が最も多く、「より良い仕事を得るために」がこれに次ぐ。「読み書きを学ぶ」、「新知識を得る」、「生活水準を高める」がこの外に選ばれた理由である。

「新しい農業技術を学ぶ」、「農村開発に寄与する」、「国の発展に寄与する」などの実用目的あるいは高邁な目標がいずれも見むきもされないことに注意しておきたい。15才以下の息子をもつサンプルに対して、息子をどの程度の学校までやりたいかとたずねると、ただ一人中等教育までと答えた者を除いてすべての者（93%）が大学までと答える。娘についても同様の回答が得られ、回答者16名中15名（94%）が大学までと答えている。将来子供をどのような職業につけたいかをたずねた結

表12 学校教育を「良い」とする理由*

理 由	選んだ者の数	回答者総数に対する割合 (%)
読み書きを学ぶ	8	33.3
新しい知識を得る	7	29.2
よい作法を学ぶ	0	0
新しい農業技術を学ぶ	0	0
より良い就職機会を得る	11	45.8
国の発展に寄与する	0	0
家族の生活水準を向上させる	6	25.0
農村開発に寄与する	0	0
子供の将来のため	18	75.0
子も家族も村人の尊敬を受ける	0	0

* 重複回答を認める。n=24.

表13 子供に望む職業

職 業	男 児	女 児
官 吏	5	
教 師	5	12
農 夫		
巡 査		
商 人	2	1
政 治 家		
兵 士		
工 員		
書 記		
看 護 婦		1
そ の 他	1	1
回 答 な し	2	1
計	15	16

表14 村落生活において尊敬する人

人 物	人 数	回答者に対する割合 (%)
ポンドックの宗教教師	16	66.7
プングル	8	33.3
イ マ ム	5	20.8
ブンガワ	1	4.2
他の宗教教師	1	4.2
両 親	1	4.2
兄 弟	1	4.2
お じ	1	4.2
い と こ	1	4.2
その他の人物	3	12.5

果は表13の如くとなる。男児に対しては官吏・教師が最も多い希望を折半し、女児に対しては希望はほとんど教師に集中する。

村落生活で誰を尊敬するかとたずねた結果は表14に示す通りである。最も尊敬されているのは、ポンドックの宗教教師、次いでプングル、イマムということになる。複数回答を許すたずね方をしているにもかかわらず、総じて回答数が少ないことは、村落生活において強力なリーダーが存在しないことを示すものであり、とくにプングルを選ぶ者が33%しかいないことは注意すべきである。ポンドックの宗教教師は村人の一種の理想である地位を失ってはいないが、彼に従う若者が現在ではほとんどいなくなっているのは上述の通りである。他方、村の中には小学校教師が居住しており、また近くの学校には教師が通って来るにもかかわらず、教師が尊敬される人物に挙げられないことは、彼らが村の生活からは遊離していることを物語っている。教師の生活は安定した豊かなものであり、村人が子供の将来の理想とするのはこのような教師像である。村人の理想の実現は非農民化に外ならないのであって、ここにマレーシアにおける農村開発と教育の役割における大きなジレンマが存在するように思われる。

VI ま と め

マレー農村における経済的変動は著しい。おそらくマレーシア政府のマレー人を重視した開発政策が効を奏してきたことによるものであろう。開発の焦点となった大きな二期作化地域や油やし・ゴム園を中心とするジャングル地帯に比べると、調査地ガロックはちょうど開発の谷間に位置し、政府の政策の恩恵を受けることが少なかったが、それでも外部経済社会の変動に応じてここに示したような対応を示してきたのである。

現在までのところとくに目につく変動の傾向は以下の通りである。稲作農村を変化させる主

因である高収量品種は、ここでは水条件の不備のため全く受け入れられていない。しかしながら、農民の間では伝統品種の中から優秀な品種をさがそうとする努力はたえず続けられており、収穫の不安定さのためときには金を捨てる結果にさえなるトラクター賃耕が、現金収入の増加に従って急速に普及しつつある。⁵⁾ このような変化をひきおこしたのは乾期の水田を利用して行われるようになったタバコ耕作であって、これがこの村の経済的変化の原動力となった。タバコ耕作は農民の収入にとって、二期作地域において高収量品種が果たしたのと同じ役割を演じている。しかしながら、外部社会の経済変動はより激しいため、それに対応する形で出稼ぎが再び盛んになってくる。この意味ではマラカの農民が数年前に経験したものと同じパターンの変化をたどろうとする徴候がみられる。⁶⁾

外部社会からのインパクトは経済的側面のみならず、文化的な側面においても加わってくる。学校教育はこのようなインパクトの最たるものである。マレー語（マレーシア語）をメディアとする中等教育の一般化はこの村の若者達をもまき込むことになるが、農民の収入の増加と政府のマレー人優先的な奨学制度とは、農民の側の積極的な対応を促進している。他方、伝統教育の担い手であったポンドックはその若者教育の機能をほとんど完全に失う。学校教育は若者を村外志向的にさせるが、それは親達によっても支持されている。かくして農村開発は、将来の農民の農村脱出を暗示するような方向にむかって進んでいるのである。

5) Moerman は北タイの農村で村から遠い収量の不安定な水田においてトラクターの導入がある意味では投機的に進展する過程を描いているが、ここでも、投機的という意味では同じパターンの変化が生じているといえる。このような変化がおこることは Moerman も予測しそこなったが、農民の経済的行動にはきわめて迅速なものがあるといわねばならない。cf. Michael Moerman, *Agricultural Change and Peasant Choice in a Thai Village*. Berkeley and Los Angeles : University of California Press, 1968.

6) マラカの出稼ぎについては、前田成文「マラカの出稼ぎ農村ブキッペゴー」、口羽・坪内・前田編著『マレー農村の研究』創文社、1976参照。